慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	統一に至るまでの旧ファランヘ党について
Sub Title	
Author	井上, 卓也(Inoue, Takuya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.3 (1970. 2) ,p.101(365)- 102(366)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700200-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

芸術的創造と表現」の三つを挙げ、第三の「芸術的創造と表現」は資料が無数にある場合にとらねばならぬ方法である、といい、その際において「限れらた言葉をもって無限の直感を与え得るような特殊の表現の様式をとらぬ限り資料は意味ぶかい表現をもつことはないであろう」ことを指摘しているのである。

われわれの直面している現代の世界はこれを歴史記述という点から見ればまさにその様なものであろう。

ここに現代の歴史家あるいは文明批判家とも呼ばれている四人、すなわち英国のアーノルド・トインビー Arnold J. Toynbee (1889-)、英国のクリストファー・ドーソン Christopher Dawson (1889-)、フランスのアンドレ・ジクフリード André Siegfried (1875-1959)、スペインのオルテガ・イ・ガセット José Ortega y Gasset (1883-1955) のそれぞれのいくつかの著作のなかを探究し研究してみると、現代世界に生きるわれわれに大きな示唆と教訓と理解を与えないではおかない事柄が数多く見出されるのである。これら四人はいずれもみな、このわれわれの直面する二十世紀の世界と真摯にとりくみ、これを著述していったが、またその各々がほとんど全世界に知られ読まれているという一般性と普遍性をも認識せねばならぬであろう。そのことはまた同時に、全世界の至る所どこであろうが、われわれの現代世界の直面する諸問題は、どの個人にしてもほぼ共通したテーマやファクターに焦点が絞られてきたということになるのであろう。

そしてたとえばこれを、

序
一、ヨーロッパについて
二、アメリカについて
三、アジアについて
四、ナショナリズムと現代世界について
五、現代の科学技術と産業文明について
結

（以上論文目次）

についてみてゆくとき、この四人のそれぞれの著作の中における探求と研究の個所は、これをひとつにまとめると補いあい相対し、相助けあってそれが全体としてひとつの「現代の歴史的思考について」ともいうべきものを提示するのである。

新しい時代においてこれから新しい現代の歴史論や文明論や現代論やあるいは未来論がでてくるとしても、これら四人の人々の業績を理解し回顧し再評化してみることは、われわれにとって重要で意義のあることであると言わなければならないであろう。

（本塾大学院文学研究科修士課程在学）

統一に至るまでの
旧ファランヘ党について

井上卓也

一九三〇年代初期にその源を発し、創立者ホセ・アントニオのファシスト思想とムッソリーニの影響を強く受けたナショナル・サ

ンディカリズムの経済思想を掲げた旧ファランヘ党は、従来の旧体制的要求を掲げていた保守勢力たる王党派や大土地所有者、教会勢力とは全く異質な運動グループだつた。その主張はスペインの帝国時代の力の回復を目指すと同時に、ないがしろにされていた無組織労働者、無力な中産階級の愛国的反社会主義的要求に巧く答え、徹底的な愛国主義的労働者革命（結局はムッソリーニの協調組合主義、即ち少数の主権者の統治にまつたくゆだねられた職能別労働組合組織の設立要求に他ならない）を暴力的な運働を以つて実行しようとした。旧ファランヘ党は人民戦線政府やスペイン北部に強力な勢力を有したいた組織労働者（社・共系）に対抗すべく将軍達の反乱に力を貸し、結局人民戦線への反乱峰起の決定的な源動力となつた。旧ファランヘ党はその独自の民兵組織を以つて反乱側に大きな軍事的な寄与を果し、人民戦線側捕虜等で党員数を急に増大させる一方、指導者ホセの死でその内部の権力争いが激しくなり、結局独伊の援助で反乱を勝利に導いたフランコ将軍に、その思想的（政策的）基盤を利用される事となつた。そして、当時のもう一方のスペイン独自の保守勢力カロリスタ党と連合させられ現在の新ファランヘ党に至るのである。だから現在の〝新〟ファランヘ党は独のナチスとは違つて決して自分の力で大きくなつたものではなく、全くの上からの〝間に合わせ〟政策によつて成立したものである。統一以前の旧ファランヘ党はマドリードを中心として、内部権力争いに明け暮れる左翼や極度に理想主義的なアナーキズムそして又旧態依然たる教会、王党勢力、以然として中世的な地頭（カシケ）にその徹底な搾取をやらせている大土地所有者といつた勢力に不満を持つている愛国的な学生や未組織労働者の要求に巧く答えたと云えようが、その勢力は反乱が起こらなければ結局は一つの小さなファシズム運働に終わつたものと云えよう。もつとはつきり云えば反乱が起つても独伊の援助がなければ現在の新ファランヘ党はその独自の力に依つては今日存在しえていない勢力である。旧ファランヘ党はその基盤にはスペイン独自の影響があるのだがその具体的な政策はきわめて曖まいであつて結局は独伊のファシズムとそれ程要求には大差はないのである。ただ反教会的であり反王党的であり反大土地所有者的主張をしているのは、旧ファランヘ党がもともとそうした間隙を狙つているものであつた事からしても当然と云えよう。ナチスやファシストとは違つてファシズム勢力と云つても旧ファランヘ党の場合は結局〝党〟ではなく単なる思想実践のための一グループ以上のものではなく、その要求にも前記のものが掲げる様な領土的な或いは人種的な（スペインの状況上あたり前だが）要求といつたものは皆無で結局は全体主義統制経済政策を軸としたスペインの〝力の回復〟を目指すといつた程度のものであつたといえる。ただその成立年代を考え合わせるとアメリカ大恐慌の影響を考えないわけにはいかず、そして又先の軍事独裁プリモ・デ・リベラの力の残存も旧ファランヘ党の成立に力があつたと云えよう。

（本塾大学院文学研究科修士課程在学）